

対人恐怖心性 と ADHD 傾向 と の 関 連

— 不注意傾向と多動-衝動性傾向における対人恐怖心性の抱き方の差異について —

20009FRM 麻績 梨沙

キーワード：対人恐怖心性, ADHD 傾向, BIS/BAS

I. 問題と目的

1. 大学における発達障害学生

大学における発達障害の学生の割合は平成19年度で2.8%、令和2年度で20%と11年間で急増している(日本学生支援機構,2008,2021)。また令和2年度の調査では、大学において発達障害の診断がある、または診断はないが発達障害の疑いにより教育上の配慮を受けている学生(以下、発達障害学生)数は7213人にのぼり、そのうち注意欠如多動性障害(以下、ADHD)は約25%を占める。このような現状や、DSM-5(2014)で成人期のADHDの診断を視野に入れた改訂がなされたことから、今後も発達障害学生においてADHDの割合は増加していくことが予想される。

2. ADHD と Gray の 気 質 モデル

ADHDとは、不注意および多動-衝動性等の行動特徴を有する神経発達症である。ADHDは適切な支援がなされなかった場合に二次障害に陥る可能性が高いが、そのうちADHDと内在化障害との関連を理解するためのアプローチとしてGrayの気質モデルがある。Grayの気質モデルは、人間の行動は行動抑制系(BIS)と行動賦活系(BAS)という2つの動機づけシステムによって制御されるという考えが基盤にある(高橋他,2007)。小口・高橋・高橋・熊野(2018)は、ADHD症状のうち不注意傾向の高い者はBISが強く、抑うつや不安が高まる傾向にあること、多動-衝動傾向の高い者はBASが高く、抑うつや不安が弱まる傾向にあることを明らかにしている。

3. ADHD と 対 人 恐 怖 心 性

大学生のADHD傾向者が抱える問題については、コミュニケーションのズレや不安といった対人関係や情緒面における問題などが明らか

になっている(篠田, 沢崎, 篠田, 2015)。またADHD傾向者の対人関係に関する研究では、ADHD傾向者における対人恐怖心性の高さ(長村, 2008)が指摘されている。対人恐怖とは、人前で不当に強い不安と緊張が生じ、自分が他者を不快にさせるのではと思ひ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一型(笠原, 1975)とされており、一般青年がもつこの心理的傾向は対人恐怖心性と定義されている(堀井・小川, 1996)。先述したように、ADHD傾向者においては対人恐怖心性が高いことが明らかとなっており、特に不注意傾向者の方が多動-衝動性傾向者よりも対人恐怖心性が高いことから、長村(2008)は不注意傾向者と多動-衝動性傾向者において対人恐怖心性の抱き方に違いがあることを指摘している。しかし、その要因については明らかになっていない。

4. 目的

よって本研究では、Grayの気質理論を用いてADHD傾向者における不注意傾向者と多動-衝動性傾向者の対人恐怖心性の抱き方の違いについて明らかにし、発達障害学生における心理的支援を検討することを目的とする。ADHD傾向者において不注意性と多動衝動性はBIS/BASを媒介として抑うつ・不安に影響を及ぼしていることから、ADHD傾向者における対人恐怖心性の高さの背景要因にもBIS/BASがあると考え、以下の仮説を立てた。

仮説1：ADHD傾向者において不注意傾向はBISを介して対人恐怖心性を高める。

仮説2：ADHD傾向者において多動-衝動性傾向はBASを介して対人恐怖心性を低減させる。

II. 方法

1. 調査対象者：A大学の大学生および大学院

生を対象に質問紙調査を行った。140名（男性46名、女性94名）のデータを分析対象とした。

調査対象者の平均年齢は、19.7歳であった。

2. 手続き：2021年7月の講義時間中に質問紙を配布し、集団的に実施した。実施時間は約20分であった。

3. 質問紙の構成：①対人恐怖心性尺度（堀井・小川,1996,1997）, Behavioral Inhibition System/Behavioral Activation System 日本語版（高橋他, 2007）, ③ADHD傾向測定尺度（長村, 2008）, ④フェイスシート（年齢, 性別）

III. 結果

各尺度の因子分析を行った結果、対人恐怖心性尺度では5因子が、BIS/BAS尺度では3因子が、ADHD傾向尺度では2因子が抽出された。仮説を検証するために、パス解析を行った。その結果、「不注意傾向」が「BIS」を介して（ $\beta = .40, p < .001$ ）, 「目が気になる悩み」（ $\beta = .82, p < .001$ ）, 「集団に溶け込めない悩み」（ $\beta = .66, p < .001$ ）, 「自分や他人が気になる悩み」（ $\beta = .65, p < .001$ ）, 「社会場面で当惑する悩み」（ $\beta = .69, p < .001$ ）に有意な正の影響を示した。また、「自分に自信がない悩み」に対しては、「不注意傾向」（ $\beta = .40, p < .001$ ）と「BIS」（ $\beta = .69, p < .01$ ）が直接的な影響を及ぼしていた。多動-衝動性傾向については、「多動-衝動性傾向」から「BAS報酬刺激への反応・探求」および「BAS駆動」への有意な影は示されなかった。「多動-衝動性傾向」とBASの各下位尺度が対人恐怖心性に及ぼす影響を確認したところ、「多動-衝動性傾向」は「集団に溶け込めない悩み」（ $\beta = -.20, p < .001$ ）, 「社会場面で当惑する悩み」（ $\beta = -.26, p < .001$ ）に対して有意な負の影響を、「BAS報酬刺激への反応・探求」は「自分に自信がない悩み」（ $\beta = .86, p < .001$ ）, 「目が気になる悩み」（ $\beta = .73, p < .001$ ）, 「集団に溶け込めない悩み」（ $\beta = .53, p < .001$ ）, 「自分や他人が気になる悩み」（ $\beta = .49, p < .001$ ）, 「社会場面で当惑する悩み」（ $\beta = .51, p < .001$ ）に対して、「BAS駆動」は「集団に溶け込めない悩み」（ $\beta = .34, p$

$< .001$ ）, 「自分や他人が気になる悩み」（ $\beta = .41, p < .001$ ）, 「社会場面で当惑する悩み」（ $\beta = .33, p < .001$ ）に対して有意な正の影響を示した。

IV. 考察

本研究の結果より、ADHDの不注意傾向と多動-衝動性傾向における対人恐怖心性の抱き方についてBISが関与している可能性が示唆された。ADHDの不注意症状の高い者は、対人場面で不注意症状による失敗や他者からの批判といった経験が幾度も重なることで、そのような結果が予期される状況でBISが高まり、結果として対人恐怖心性が高まっている可能性がある。

一方で、多動-衝動性傾向は「集団に溶け込めない悩み」と「社会的場面で当惑する悩み」を直接的に低減させる可能性が示唆された。このことから、不注意傾向者は多動-衝動性傾向者よりも対人場面においては心理的ストレスを抱えやすく、うつ病や不安障害といった二次障害を引き起こしやすい可能性が考えられる。

大学生のADHD傾向者において不注意傾向者と多動-衝動性傾向者への心理的支援について考える。不注意傾向者については主に失敗予測がBISを活性化し対人恐怖心性が高まっていると考えられることから、まず彼らに対してはこれまであまり理解され来なかった苦しみを「理解してもらえた」と感じられるよう、受容的アプローチにより学生をありのままに受け止める支援が必要になると思われる。一方、多動-衝動性傾向者については対人恐怖心性との関連が低く、また集団場面および社会的場面では対人場面において周囲を気にせず躊躇いなく動くことができる傾向があることが明らかになった。したがって、大学において入学直後や部活やサークルへの入部直後など学生生活の初期の段階では対人場面で問題が生じる可能性は低いかもしれない。しかし、その後グループ内での関係維持の面で問題が生じる可能性はこれまでの研究からも十分に予想される。そのため、対人場面における問題行動を周囲が指摘し改善していくような、SSTなどが有効であると考えられる。